
マジックパンプキン

happycome

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックパンプキン

【著者名】

N3657F

happycom
e

【あらすじ】

ある年の10月30日、ハロウィン前日。いつも仲良し6人組がハロウィンの準備をしようと仮装セットを買いに行く。そこから物語は始まつた・・・・この話は現在休載しています。

第一話・ハロウイン前日

ある年、10月30日、ハロウイン前日。午後3時頃

「ハロウインって、カボチャとかかぶつたりするやつ？」 わあ！ 楽しそう！！

目をキラキラ輝かせながら話すのが、川本祈。超がつく天然だ。

「えー、だりいんだけど。お前らで買つてきて。」
と少し小さめな声になりながら話すめんべくわがりやの少年、遠藤えんどう

一度はやめるとどうしたんやるが、それまでが問題だ。

と少し小さめな声になりながら話すめんどくさがりやの少年、遠藤
えんどう きょうすけ 狂助。

「まあ、みんなで買い物に行きましょう。そして仮装で鬼ごっこ」とか・・・・・「

イキナリ何を言こ出すのやア。ホントに何を考えているかわからない靈道辰則。

「 もおー...こーちゃんー... 仮装鬼うーーー 爆走しちゃうよーーー

?

常テンションMAXの爆走少女 みなみひなこ 南雛子。

学年一の足の速さで、鬼ごっこで勝率95%！ 残りの5%は眠に引っかかった。

とやの氣満々な熱血少年、片山行。

熱血話を始めると1時間止まらない

「よしー多数決の結果5対1でみんなで行くーーじゃあレッツゴーー」

と言いながら魔魅は歩いていく。
祈、辰則、雛子、守は魔魅の後ろについていった。
残る狂助は・・・

「めんどくせえなあ・・・・・・ちつ、いくか・・・・・・」みんなの後ろについていった。

街中

「なんかいい感じのおもちゃ睡れんないのかなあ・・・・・」
ぼーつ「毎度」ばびづう「毎度」ばびづう

と見渡しながら魔魁は言つた

少しニヤける辰則。

そこで雛子が

「お前の不思議な感じはどうせオカルト系の『いいと悪づかーー！』行こう！——楽しそうだしー。」

L

祈の声は雛子の声を完璧に書き消して聞こえた。

と守はるび、ダッシュ。

「恐るべし天然…………。けどダッシュや負けないよーー！」

L

少しショックな顔をしていたが、
気を取り直してダッシュ。

「ちよつと待つてよー！」

魔魅は悲しみながらダッシュ。その後ろに祈がダッシュ。

残り一人は・・・・・

三田丸説の概要。

辰則の声には少し不安の表情。

そして一人もダッシュしていった。

静かな商店街

商店街なのだがほとんどが閉店していて、つぶれていた。

「辰則さあ～ん。じこに不思議な感じの店があるんですかあ～？？」
キラキラ輝く目で祈は辰則を見つめる。

用意は用紙を選びし
者にて書之

「」の奥にあるのですが・・・・すゞい不思議な感じがします。危険なのか安全なのかもわかりません。靈がいるかもしれません。それでも行つてみますか・・・・？」

「行つてみよう。たとえ危険でもこの6人なら
きっと乗り切れる。きっと…」

魔魅の声はわからない程度に少し震えていた。

8秒間の沈黙の後…

「……………行こうぜ。悩んでたつてしようがねえ。危険なら
その場ですぐ自慢の足で逃げればいいじゃねえか。な？ そうだ
ろ？」

意外にも狂助が言った。その一言で空気が軽くなり、
「よし。決まりだな！ いくぜおめえらあ！！」

変なところでも熱血な守を先頭にその店に向かっていった。

「いいです。ここが不思議な店です。」

見た感じがボロボロ。本当にこんな状態で店ができるのか心配な
らい。

けど、明かりはついていた。看板には、こう書いてあった。

～玩具屋「ドリームナイト」～

「よし、入つてみよう。いくよ？」

今度は魔魅を先頭にして店の中に入った。

「ようじや、いらっしゃい。よくこんなところ見つけられたの。お

70代後半ぐらいのおじいさんが出てきた。

辰則はこの瞬間、何か違和感を感じた。

第一話：ハロウィン前日（後書き）

どうでしたか？評価・感想まつてます！

次回は店の中で6人の運命が変わる出来事が・・・

更新は遅れるかもしぬません^ ^；

第一話・不思議な玩具屋

「よハーハ、こりハシャゴ。よハーンなどハルを見つけられたのむ。

」

70代後半のおじいさんが出てきた。

顔はしわしわで田が微妙に見えるぐらい。
そんな弱弱しい田で6人を見つめていた。

辰則はこの瞬間、違和感を感じた。

「おじやましまあ～す・・・」

魔魅は言いながら周りを見回してくる。

並んでこるのは今時売ってなさそうな玩具ばかり。

「ハの時期にくるつて」とはハロウインの仮装じやろハヘ・ハコハ一、

そりで待つておれ。」

おじいさんは店の奥に探しに行つた。

「ハの店・・・やばいです。こりんな意味でやばいです・・・」

辰則が少しじぶくびくしている。相当怖いのだつ。

「なんでそんなにびびつてんだ?普通の玩具屋じやないか。気合だ
氣合こー。」

守は言つた。そして辰則は恐る恐る口を開いた。

「ハにあるすべての玩具・・・全部靈力のよつなものが宿つてゐ
んです。」

「けど靈力ではない・・・けどとても不思議な力が・・・」

みんなびっくりした。本当にそんなことがあるとは誰も思わない。

「どうしたんじや?ほれー仮装セツトもつてきたぞ。」

おじいさんがかごにいろいろ衣装を入れて持つてきた。

「さみこせじれをやうひ。すてきじやうひ。」

魔魅は魔女の帽子うしき帽子をもらつた。

真つ黒でツバ付きの三角帽子。先端部分は後ろに折れしており、先端には大きい星が付いている。

まきの帯は赤色で、ほんとうに魔女の帽子のようだ。

「そして次、君にはこれがいいじゃうひ。信教などは関係ないぞ？」
祈がもらつたのは聖なる十字架。

本当に神から授かつたような神々しい物だが、真ん中にお化けの力ボチャの目と口が付いている。やはりハロウィンの道具だから遊びな部分があるようだ。

「そして君にはこれをあげよう。カツコイイ双剣じや。」

狂助は銃刀法違反で捕まるかもしれないほど本物に近い剣をもらつた。けど刃ではない。

握りの部分は真つ黒だが、さりげなくカボチャの顔が。

「君には・・・やはりこれじやうひ。君の血に反応してくれるはずじや。」

辰則は真つ黒な勾玉をもらつた。かなりビッグサイズで、殴られる

と痛そう。

穴が力ボチャの目になつていて、見事なデザインに仕上がつている。そこで辰則はふと思つ。

(なぜこのおじいさん・・・僕の血を知つてゐるんだ?—)

「君にはこれじや。元気な君にお似合いじやうひ。」

雛子がもらつたのは・・・

「えー！カボチャの被り物ー？！+ みたいな～・・・」

ちなみに とはカボチャの頭についている縁の三角帽子である。ちゃんと口と耳の部分は穴が開いている。結構可愛い感じだ。

「最後に君には・・・これじゃ。カツコイイじゃね？？」

守は首飾りをもらつた。

ダイヤの形で真ん中に十字架が書いてある。そして左右に翼がほどこされている。

聖騎士が身に着けているような首飾りだ。

「あの・・・えつと・・・代金は・・・？」

魔魅はすつと心配していた。実はお金はみんな自己負担なのである。

「ほ？代金はいらん。全部、無料タダであげよう。」

「わーい！ありがとうございます！おじこれまお。」

祈はすぐさま答えた。天然パワー炸裂。

「これでお前たちの運命は変わった。

その衣装はみんなで交換してはいけないんじや。

交換してしまうと、不幸が付いてくるそうじやよ。」

おじこさんは高らかに言つた。

「このまま着るということだな。たしかにそれならめんどくさい。」

狂助は少し安心して言つた。

「ちなみに皆で明日同時に身に付ける。それが鉄則じや。」

「はーい！」

女性3人組は答えた。辰則は黙つたまま、守はすつと首飾りを見つめている。

「さて、もつこんな時間じや。帰らないと怒られるんじやないのか

時計の針は7時を指していた。

「やばい！」

？」

「おじいさんありがとうございました！」魔魅がお礼を言い、6人同時に走り出した。

「さて、これからが楽しみじゃな。あの子らに、あそこの運命を託した。

あ、そろそろ準備しないとやばいな。

「30歳ぐらいの青年^{せいねん}が呟いた。

顔もキリッとしていて、モテ顔間違いなしの顔。おじいさんがいた場所に、その青年は立っていた。おじいさんは、もういない。

「じゃあみんな！明日放課後！－いつもの場所に集合！－！」

「自分の衣装を持つて！あとお菓子・マネーも！－じやあ解散！－！」

魔魅が急いで言つて、みんな家に帰つていった。

そして・・・10月31日。

第一話・不思議な玩具屋（後書き）

用語解説

まき：帽子の帯の部分。

握り：剣の持つところ。

カボチャの顔：（・w・）

第三話・Halloween

ある年の10月31日。ハロウイーン当日。

「みんな集まつたー？！！」

魔魅が言った。テンションはMAXに近い。

「集まつてますよお～。衣装も持つてますよお～？」

祈もテンションロードなようだ。

「うおおおおりやああああ～～やるぜやるぜハロオオオオウイイイン～～！」

もう既に変人になつた守が言った。

「同時につけるんだよね？？みんなセットしよ～～～！」

案外離子がテンション低いのは、他の一人のせい。

そのほかの二人は、

「・・・・・」

無言。

「さてさて、もうみんなもつた衣装はセットできましたか～～？」

魔魅はノリノリ声で言った。

「できましたよ～～つていつも僕は持つだけみたいですが～～」

辰則は少し不安そう～～。

「もう～～何が起きても知りませんよ～～？」

とさつげなくつぶやいた。

「もういい。めんどくせえ。せやべやわい～～・・・・」

狂助はやたら面倒くさがりだ。

「でわみなさん～～きますよ～～・・・・」

祈が顔で「セットの用意しちゃ」と田配せして

「…………せ——のつづ……」

0.01秒も狂わず、6人は同時に着た。すると、あたりが真ツ黒になった。

「えつ……じじビニ?/?真ツ暗!-!」

魔魅が最初の一聲を出した。

「氣合だ氣合だーーー！にしてもこの首飾りチョーカッコイイ！俺様最強！！」

と守はナルシストになつていた。

「おい！辰則なんかわかるか？」

雛子は少し混乱しながらも言つた。

「なんか不思議なところですね。」

「けどここ……」

となにか言いかけたところで言つのをやめた。

「けどここ……がなんなんですかあ？辰則さん？

けどここ……楽しそうですね！とかですかあ？？

ひとり空氣読めてない祈。

「で・・・本当にここにいるなんだよ・・・・・」

狂助が一番心配していた・・・。

そんな時、急に明るくなりあたりが真っ白になつた。

「「みんな～ん！魔界へようこそ！…！」」

結構子供な声が聞こえてきた。

6人は同時に声の主を確かめようと振り向くと
身長130cmぐらいの男の子一人が立っていた。

キラキラ輝く顔。夢と希望に満ち溢れた目。

二人はそんなそつくりな顔と目で見つめてきた。

「「僕たち、みなさんを魔界「キイスティナ」に送る仕事を任せられました。」」

「インフレです！」「デフレです！」

「「僕たち双子なんどっちがどっちかわからなくなると思しますが
よろしくお願ひします！」」

とかわいらしい双子は言った。

「「「「魔界、キイスティナ！…？？」」」

と6人はハモつて言った。そして死ぬほど驚いていた。

「魔界……なんで魔界……？」

魔魅は不思議で不思議でたまらなくて少し混乱。

「あなたたちが身に着けているその帽子、十字架、双剣、勾玉、被

り物、首飾り。

全部魔導具なんですよ！しかも伝説級！！！」

とインフレが言い、

「だって、ケテルの魔帽子、コクマーの十字架、ネツァーの双剣、
ビナーの勾玉、ティフェレトの魔冠、ホドの首飾り……
全部「マジックパンプキン」の遺物です！！」

続けてデフレが言った。

「ケテル……王冠……ですか？

それにコクマー……知恵？

そしてネツァー……勝利……。

ビナーで理解、ティフェレトで美、ホドで栄光……。
と辰則がぶつぶつぶやいた。

「そうです！大正解です！えらいですね～。

それが各魔導具の意味ですよ～。」

インフレはびっくりして言った。

「すげえなあ、お前。さすが靈道一族長男。」

雛子はさりげなく言った。

「あのお、マジックパンプキンってなんなんですかあ？おいしいですか？」

とまた訳のわからぬことを言う祈。

「マジックパンプキンくどこののは、魔界で最強！と言われてきました6人のチーム名です！

その人たちは魔界の悪の魔王「ベースダー」を洞窟の奥底に封印し、この6つの魔道具に

自分たちの魂を封印した……といつ言い伝えがあります！」
とデフレが答えた。

6人は混乱した。

ただ・・ただハロウインを楽しもうとしただけなのに着た瞬間魔界
かなんかに飛ばされる、

伝説の魔導具を持っている、魔王を封印した6人……。

とにかく訳がわからなかつた。

「あ！そろそろ時間がありますねえ。

では、少し修行の間にでも行つてもらいましょうか。」

とインフレがいきなり言い出した。

「え・・・？ 修行の間つて何？」

魔魅は恐る恐る聞いてみた。

「魔界に行つたら、いろいろ危険なので戦闘も含めて修行の間で練習してもらいます！」

とデフレがはつきり答えた。

「…………え……………………」

6人はビックリ。けど、少しワクワクする気持ちもあつた。「ではでは飛ばしますよ～！ みなさん準備してくださいね～。」とインフレが言い、一人で何かを唱え始めた。

「「神々の戦士たちよ 我の声に答え、彼らを導け
開け！ 修行の間！…」」

呪文スペルを言つた後、後ろに謎の黒い穴が3つ現れ

6人はそれぞれペアずつ穴に吸い込まれていく。

そのとき何故かお金の音が聞こえた。

「だづげでー～！！！」

雛子スペルが出すとんでもない声。

「めんどくせえことになつてきたな・・・まじで」と狂助が言い、みんな吸い込まれていつた。

インフレ・デフレがつぶやいて、
その顔には、闇が映っていた。

暗闇に消えていった。

第二話・H a l l o w e e n - (後書き)

さて、6人は修行の間という謎なところに飛ばされてしまいました。
次はペアごとにお話がすすんでいきます。
気になるペアの組み合わせは・・・?

第四話・ペアで修行！その1

「いっつたああーいきなり落されるとは……って、ハハハ
こ〜・・・？」

辺りを見回しながら言つ魔魅。

魔魅が見た場所は

遺跡の跡あとみたいなくずれた建物があつたり……

食べてくれとささやいてそうな木の実がついている木々
「六甲のおい い水」並に透き通つた湖。

「わあ・・・一応生きていけそつな感じ・・・かな？」

ふう・・・つとため息をつく。

そして癖のように、ぼーっとし始めた。

今までの出来事を整理しているのだろう。

「・・・い・・・・・・・　おい・・・」
「・・・・・・・・」

魔魅は気づいていない。

「おい・・・・　おい！」

「ふあ・・・・？」

ぼーっとしてよくわかつていない。

「おいー！ぼーっとするなー！立てー！」

「・・・・・狂助え？！」

狂助が魔魅の前に立つていた。

「さつさと起きる。

どうやら俺ら一人だけみたいだぜ・・・ちっ、めんべくせえ。」

「えー！みんなないの？！本気ですか・・・
はあ・・・つと一人はため息をついた。

「おー一人さん！そろそろ修行始めようよー。」
「ただでさえ時間ねえから。さつさとやるぜっ。」

20代ほどの二人の男女。

女のほうはいかにも「魔法使い」な衣装

男のほうはどこみても「戦士」のような衣装。

キラキラと存在感を見せ付ける漆黒の黒髪女。神々しいほど金色に輝く金髪男。

二人はとても仲よさそうに立っていた。

「あーちなみに私の名前はケイナ・マルソン。彼はネオン・リベック。

「おー一人さんの修行のお手伝いをします！」

「じゃあさつさといくぜ。お前はこっち。あんたはケイナについていきな。」

狂助はネオンに半強制的に連れて行かれる。

「ちよつー俺たちに何すんだよー！やめるー！」

「安心しな。お前に魔界で生き残つてもうつために修行するだけだ。」

魔魅は自らケイナについて行つた。さすがのケイナも驚き、

「あなたは何故抵抗しないの？」

魔魅は即答。

「楽しそうだから！あと二人とも悪そうに見えないし。」

そして一人は分かれて修行することになった。

「あ！私の名前は魔魅、桜魔魅です！修行ようしく御願いします！」

魔魅の元気な声は辺りの建物に響いた。

ようじくね！じやあ修行はじめよつか！

「まづ……魔魅のジョブ、職業は魔術師ね。」「まづ……魔魅去使」「どうですか？」「

わあ・・・面白そう!「

魔魅の顔は満面の笑顔。

魔法使いじゃないわよ？魔術師。
マジシャン

「おぬが一ノ美す！！！！！」

魔魅の心はワクワクドキドキでいっぱいだつた。

第五話・ペアで修行！その2

魔魅 side

「魔法使いは、ただ魔術書を読んで魔術の魔力だけで呪文を唱え、
攻撃する人。
魔術師は魔術書を記憶して自らの魔力で呪文を唱え、攻撃する人。
この違いは分かる？」

魔魅は必死にメモをしているようだ。

ケイナの異界単語を獲物を捕まえる虎のように書いている。
「あ、メモ書かなくても大丈夫。あとでどうせ全部知ることになるから。」

「そうなんですか！ はあ・・・・・書いた意味が。。。」

魔魅は少しがつかりしたが、すぐ気を取り直し話しの続きを聞く体勢に入った。

「魔術師は魔術書を見つけたら記憶すればいいだけ。

魔法使いより簡単でしょ？ けど、少し欠点があるのよねえ。」

ケイナは、最初の頃が一番しんどい、と顔をしかめて言った。

魔魅はその顔を見て少し不安になった。

「その・・・欠点つて何なんですか？」

ケイナは、はあ、とため息をつき、

「欠点はね、魔術書を脳に直接、記憶するから

激しい頭痛がするの。最初は本気で痛いのよ。」

魔魅の顔は反射的に嫌がつた。だがすぐに元に戻り、少し微笑んだ。

「痛いだけなんですね？ なら大丈夫です！」

「私、痛いのは慣れてるんですよ！だから、修行始めてください

！」

「本当に？ いいの・・・？」

魔魅は大きく縦に首を振った。

「じゃあ、これが魔術書。^{ブック}これを開いて。」

ケイナは大きな紫色の本を差し出した。

狂助 side

「いつてえんだよ！いい加減離せ！！」

「まあまあそんなあせんなつて。これからお前さんを強くしてやるんだからさ？」

ネオン・リベックはへらへら顔をしながら手から離した。狂助はへらへら顔が嫌いみたいだ。しかし、狂助の態度は一気に変わった。

「本当に・・・強くしてくれんのか？俺に力をくれるのか？」「強くしてやる！神に誓つてな。けどその前に質問。

なぜそこまで力を求める？」

狂助の信念は相当強かつた。それが田で伝わってくるぐらい。

「俺は、あいつら・・・いや、

あいつを守りたい！！そのための力がほしい。」

狂助の眼力はネオンをびびらせた。目が離れない。

見つめているうちに、狂助の目が真っ赤な血の色にかわっていった。

「あれ？お前の目の色・・・変わったぜ？？」

まさかお前・・・狂戦士か？」

ネオンはじろじろ狂助の目を見つめる。

「は？狂戦士つてなんだよ。俺はそんなの知らん。

俺、目が赤くなつたのは初めてだ。ていうか目、見るな！」

そう言つてゐる間に狂助の目は普通に戻つていつた。

ネオンはごほん！とわざとらしい咳をし、話す。

「狂戦士つていうのは

強く願つたり、思つたりすると目が赤くなつて

自分の体の限界以上の力が引き出せる能力。

別名、^{ブラックディアイ}血眼く。なかなかの珍種だぜ？

思う信念が強いほど効果も大きくなるし、すごいやつはその力を使いこなすことができる。ちなみに俺もそのすごいやつの1人！」

と言い、静かに目を閉じた。

そのときのネオンはさつきのへらへらネオンとは違う人のように思えた。

そして目を開けた。目は真っ赤な血の色をしている。

「どうだ？これが俺の狂戦士バージョン。

この状態だと普通の人間の何百倍の力がだせる。

たとえば・・・あ！この岩とか

ネオンは隣にあつた高さ70cm、直径30cmほどの岩を人差し指でちょん、と触れた。すると、一瞬で岩が粉碎。

跡形もなく。

「お前・・・今何した？」

狂助は目を疑つた。ネオンはその顔をみて笑い、

「何つて、岩に少し触れただけだぜ？これが狂戦士の力。

俺はその力を神から授かつた。力を持つことを許されたつてことだ。

お前も力を授かつたんだろう？ならのその力、使いこなせ。

使いこなさないと・・・お前は死ぬ。

てか俺の名前はお前じやない、ネオンだ。ネオンつて呼べよ。」

「どうということだ・・・俺が・・・死ぬ？？」

狂助の目は丸くなつた。信じられない顔をしている。

「そうさ。使いこなさなかつたらすぐ狂戦士になり、

バーサーカー

何回もなつてこないつむじで自分の意思が保てなくなる。そして最後には暴走する。

するとそこらの旅人に殺される。だから少ないんだ、けど正しい力を身に付け、いい相棒に出会えたらお前は良い狂戦士の使い手になれる。

「相棒？？それはどういうことだ？」

「使いこなしても暴走があるのは当たり前。それを理解して止める相棒が必要なんだ。ちなみに俺の相棒はケイナさんだ。

・・・・・よし！ちょっと俺の過去の話をしよう。」

ネオンは自信たっぷりの顔をしている。

狂助はそんな顔を見て

「なんでお前・・・ネオンの昔話なんて聞かないといけねえんだよ。それよりさつさと力を使いこなしてえんだ。」

ネオンは空を見た。真っ青な空が映し出されている。そして狂助を見て、こう言った。

「俺は・・・狂助、お前のために話す。

罪の道へ行かぬように、俺と同じ道を歩まぬように。ほんとは思い出したくもないけど、お前には言わないといけない気がする。

だから、聞いてくれ。」

第五話・ペアで修行!その2(後書き)

修行・・・まだ2人しか出ていませんがそのうち他4人も出します!
ただこの二人の話が終わり次第・・・

次回!ネオンの過去が語られる!

第六話・ペアで修行！その3～回想～

「俺に風が流れた。少し肌寒く感じる。
ずつしりと重い空氣の中、ネオンは語りだす。

「俺がまだ漢字が一つも書けないぐらいの時、誰かに両親殺されて親戚をうろうろしてたんだ。

けどどこも良い感じのところが無くて、そのうちグレしていく、中学生の時にはもう一人暮らしてた。

学校でもつるんとする奴いないし、家でも誰一人いないし……。
・どこでも一人だった。

そんな俺でも双剣を持ってて、適当に振り回してたらはまっちゃつてさ。

毎日剣の練習だけはしていた。そんなある日……。

（回想）

「なあ。お前ちょっと俺たちのためにジュース買つて来いよ
いきなり俺に話しかけてきたのはいつもクラスでリーダー気取りしてた奴だった。

「おい聞いてんのか？ さつさと買って来いよ、五人分」

そう言うと周囲からそいつの子分が4人出てきて、

「俺に逆らうつてんのか？ 俺の強さ知らないとか言わせへんぞ？」

「

子分が笑い、そいつが俺の肩を押してくる。

俺はもうその時限界だつた。

「そろそろキレン」「黙れーー！」お前に指図言われる筋合いねえんだよーー！」

四人は俺をボコボコにしようと向かってきたときに俺はやつらを半殺しにしていた。

そう、狂戦士になつて暴走していたのだ。

「お・・・・・お前、狂戦士バサカだったのか・・・・? やつやべえ・・・」

ひえりといいながらリーダーは逃げていく。

その時の俺は暴れは暴れまくって、自分の意思で体が揺れる
自分が学校を壊していく様を見ていることしかできなかつた。
逃げていく子供たち、いやな目で見るクラスメイト、先生の哀しい
目。

そんな姿しか見ることができなかつた。

そして俺は学校を出て（正確に言うと入り口を壊して暴走して）街中まで被害は及んだ。

いつも持っていた双剣を振り回し、俺を殺そうとした旅人を次々に傷つけた。関係ない人たちも傷つけた。

俺はこのまま傷つけて傷つけて、最後に殺されて死ぬんだな・・・。
・・・と思っていたそのとき

「ハーフ！ 町が壊してこないと困っちゃうの？ 」 みんなが許しても私は許しません！

町を壊すなら私を倒してからにしてちょうだい！」

一人の同じ年ぐらいの女の子が叫んできた。すこく勇気がある。その漆黒の黒髪は風を誘い、澄んだ青い目が俺を見ている。けど俺の体は気にせず町を壊していく。

「お前なんて無詠唱で十分だ！！ いけえ！ フレムガ！！」

女の子が手の平を俺に向けた瞬間、大きな焰の玉が飛んできた。なかなかの威力で、俺の背中に傷ができる。俺の身体はその少女の方を向き、突進した。

（やべえよ！ 止まれよ俺の身体あ！！）

それでも俺の身体は止まらない。

（もう・・・もう俺は・・・）

後一秒でまた女の子を傷つけてしまつ。

（俺は、もう誰も傷つけたくねえんだよ！！ 止まれえええ！！！）

（

俺の剣は女の子の肩の上ギリギリで止まった。

しかし、俺の意思が身体の暴走を一時的に止めている、といつ危険な状態だった。

女の子は手を伸ばし、俺に優しく抱きついていた。

「もう悲しまなくていいよ。憎まなくていいよ。

もう、一人じゃないから。私が一緒にいてあげるから。だから、泣かないで。ね？」

第六話・ペアで修行!-その3～回想～（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

残念ながらこの作品を一時休載させて頂きます。

他の作品を書いていくつもりなのでそちらの方をお読み下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3657f/>

マジックパンプキン

2010年10月15日17時17分発行